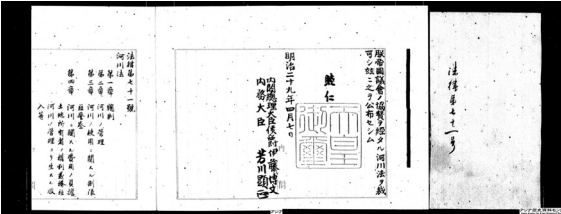


工学教育，河川法・砂防法の整備

殖産興業・富国強兵を第一とした明治政府は工学を大学レベルの教育に位置づけ、人材を確保し技術者育成を優遇した。世界の工学教育史上で特異なこの日本の方式は工部省工部大学校を生み出し、1886年帝国大学の有力な一分科、工科大学の発足をみて不動のものになった。

しかし工科大学は東京大学工芸学部と工部大学校の合併から始まったため、両者の校風の差（基礎理論教授の徹底に対して実践教育の重視）および教員や学生同士の待遇差など、多くの不協和が発生した。



●-3 河川法原本表紙（アジア歴史資料センター Ref.A03030331600, 御署名原本・明治29年・法律第71号・河川法（国立公文書館））



●-4 古市公威肖像写真（1897年44歳）

名前	資格	月給 (来日当初)	雇用期間								
			明治	5	10	15	20	25	30	35	
ファン・ドールン (蘭) C. J. Van Doorn (1837~1906)	長工師	500円		5.3.24	8.4.10	9.4.2	13.7.22				
エッセル (蘭) G. A. Escher (1843~1939)	1等工師	450円		6.9.25		11.6.30					
ムルデル (蘭) A. T. L. R. Mulder (1848~1901)	1等工師	475円			12.3.29		20.5.9	23.5.11			
リンドウ (蘭) I. A. Lindo (1847~1941)	2等工師	400円		5.3.24		8.10.31					
チッセン (蘭) A. H. T. K. Thissen (1843~1878)	3等工師	350円		6.11.15	9.11.14	9.12.1	10.9.28				
デ・レイケ (蘭) J. de Rijke (1842~1913)	4等工師	300円		6.9.22							36.6.18
ファン・гент (蘭) J. G. Van Gendt (1833~1880)	水理工師長	800円			12.2.17		13.12.21病没				
メーク (英) C. S. Meik (1853~1923)	港湾工師	不明					20.6.来日			23.4.	
パーマー (英) H. S. Palmer (1838~1893)	顧問土木師	500円			16.2.15 (三月)	17.12.1	20.5.31			21.6.23	26.2.10病没
ブルントン (英) R. H. Brunton (1841~1901)	灯台築造首長	450ドル		慶応4.2.2	9.3.15						
バルトン (英) W. K. Burton (1855~1899)	工科大学衛生 工学教師	350円						20.5.26			29.6.20

●-5 河川・港湾・水利関係御雇外国人技術者一覧。本表は建設省中部地方建設局木曾川下流工事事務所（編・刊）『デ・レーケとその業績』1987, p.27所載の表「土木寮雇備オランダ人技術者一覧」およびユネスコ東アジア文化研究センター『資料 御雇外国人』1975, 小学館などを元に加筆修正した。

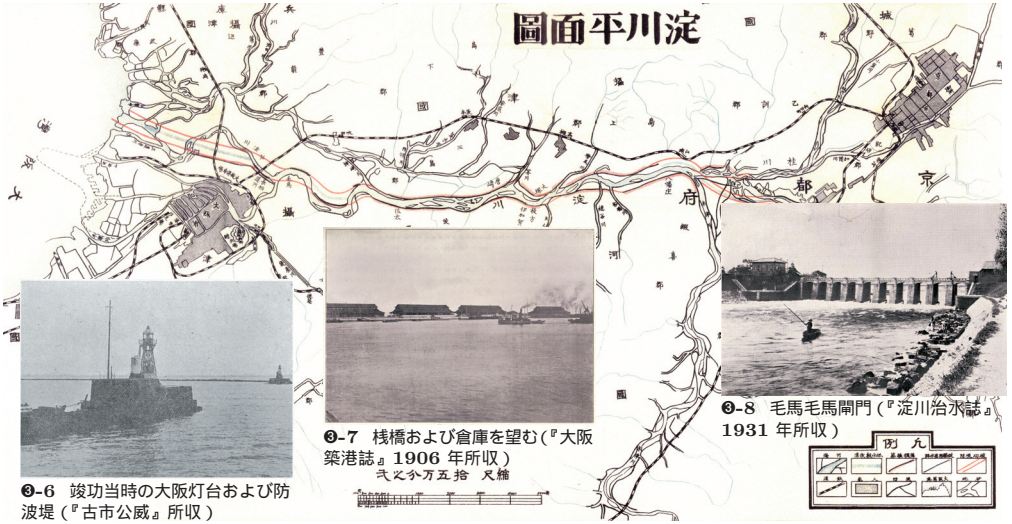
これを収める役目を負ったのが古市工科大学長であった。古市はこの難局に生来の合議に導く能力を発揮し、次第に信頼を集めて部内を一致に導いた。古市は山縣有朋のヨーロッパ巡行に主席随行人として同行し、帰国後の1890年、山縣内閣の下で土木局長に就任した。その後、1898年まで局長また土木技監として土木行政を指導した。この間の大きな成果として1896年の河川法、翌年の砂防法の制定がある。この成立に際し、帝国議会の答弁に立ったのが古市である。

治水事業は、政府直轄による工事を地方から強く望まれ、帝国議会ではたびたび建議が行われた。政府は、法の下に事業を進めるという法治国家の立場を頑として貫いた。河川法の成立に基づき、即座に淀川・筑後川で国直轄による高水工事が着手された。

明治初期、多数の外国人技術者が高額給料で持って雇われ、近代化に向けた社会基盤整備を指導していった。日本人技術者は、彼らから近代技術を吸収し、やがて自立していった。古市は河川・港湾に関してオランダ人技術者と密接な関係を持った。またバルトンを帝国大学の教授として招聘した。

淀川改修，大阪築港，横浜築港

淀川平川面圖



⑥-6 竣工当時の大阪灯台および防波堤（『古市公威』所収）

⑥-7 棧橋および倉庫を望む（『大阪築港誌』1906年所収）
式之今万五拾 尺縮

⑥-8 毛馬毛馬閘門（『淀川治水誌』1931年所収）

⑥-9 淀川平面図（『淀川治水誌』1931年所収）

淀川改修，大阪築港
淀川改修と密接な関係を持つ大阪築港は，翌97年に着工した。この両工事の計画決定に，古市は技術官会議等で指導した。欧米から多くの大型施工機械が導入され，機械力を本格的に駆使する我が国はじめての大規模土木工事が展開された。両工事を現地で指導したのは，仏工コール・サントラルでの学友・沖野忠雄である。

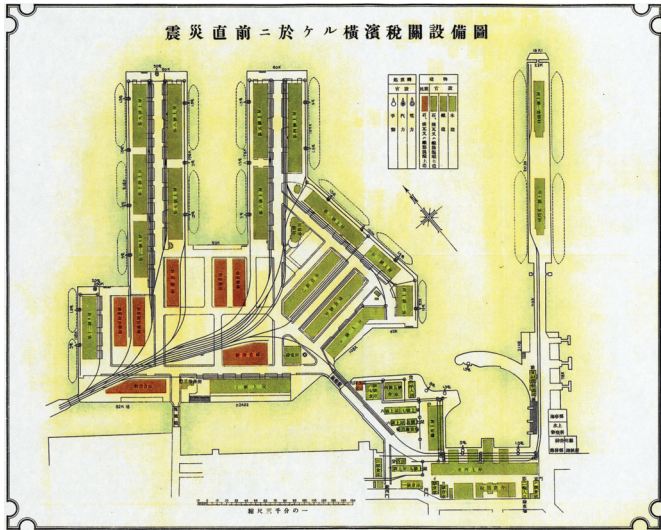
横浜築港
パーマーの計画に基づき，わが国最初の海面に防波堤で碇泊地を保護する横浜築港第一期事業が1896年に完成した。

これに続いて古市の計画により第二期事業が1899年から着工された。繋船岸壁の築造，上屋・倉庫・起重機の設置，横浜駅と連絡する臨海鉄道の整備を行うものであった。港と鉄道が直接つながれたのは，この事業が初めてであった。

1917年に竣工したが1923年の関東大震災で大きな害を被った。



⑥-10 横浜税関埋立地全景（『横浜税関海面埋立工事報告』1906年所収）



⑥-11 震災直前に於ける横浜税関設備圖（『横浜税関陸上設備震災復旧工事概要』1931年所収）